◇視聴覚資料紹介◇

（財団法人社会経済生産性本部）

ディベート能力開発シリーズ短期集中講座全２巻

岡本哲和

このビデオは、初めてディベートを行う人のための教材である。第１巻は、実際のディベートの試合を収録している。第２巻では、実際にディベートを行うために必要となる基礎的な事柄について説明が行われている。

筆者はこの教材を、総合情報学部の「基礎演習」において用いている。基礎演習とは２年生次に配当されている科目であり、３年次から専門演習（ゼミ）に所属してその後卒業研究を行っていくための基礎力をつけてもらうこと、そして早い段階でゼミ形式の講義に学生が慣れてもらうことを主たる目的としている。

私のクラスでは2004年からディベートを取り入れており、実際にどのようにディベートの試合が行われるのかを手っ取り早く理解してもらうために（学生の中には、中学や高校ですでにディベートを経験しているものもいるが、まったくの初心者も多い）、演習の時間にこのビデオ教材をみんなで見ることにしている。

断っておきたいが、筆者はディベートの専門家でも何でもない。特定の問題について議論を戦わせるという、広い意味での「ディベート（debate）」については、学会やシンポジウム、研究会などの場において経験を多少は積んでいるが、肯定側と否定側とに別れた上で、選ばれたテーマについてルールに従って討論を行い勝敗を競うという、ゲームとしてのディベートについては、経験がない。それだけではなく、ディベートというと、いかにも真面目そうな人たちが真剣な顔をしてお互いの話の揚げ足を取り合う、というようなイメージを筆者はずっと持っており、個人的に何となく好きになれないでいた（正直言って、現在でも、ものすごく好きというわけではないが）。

そのような筆者が基礎演習にディベートを取り入れるようになった理由は、以下のとおりである。

筆者はもともと、ディベートの技術それ自体に習熟することを学生に期待しているわけではないし、ましてやディベートの専門家を養成しようと思っているわけでもない。すでに述べたように、基礎演習の目的は専門演習から卒業研究に必要な基礎的な力を身につけてもらうことにある。ただし、基礎演習の担当者は、そこでの履修者をそのまま自分の専門演習へと引き継ぐわけではない。ちなみに、2004年度の私の基礎演習クラスで、後に私の専門演習に入った学生は一人もいなかった。とりわけ総合情報学部の場合は、基礎演習を終えた学生は、きわめて多様な学問分野の中から自分たちが専門的に学んでいく領域を選ぶことになる。このような状況で、どのような専門分野を選んでも、後に役に立つことを学んでもらいたい、というのが基礎演習を担当する筆者の希望である。

そこで、筆者が基礎演習のテーマとしているのが、「（科学的）研究の方法論」である。簡単にいえば、問題を発見して仮説を構築し、資料やデータを利用しつつ、それを検証

するという、自然科学や社会科学に共通する技法を学生に学んでもらうことを目的としている。

この目的のために色々なやり方を試してきたのだが、ディベートを用いるのが学生にとって効果的なのではないかと、ある時思いついた。すなわち、資料やデータを利用して、そこから論理的かつ説得的な主張を組み立てるためのトレーニングにディベートが役立つのではないかと考えたのである。さらに、ゲーム形式なので学生にとっても楽しめる要素がある。また、一般的にディベートはグループで行うので、チームワークを学ぶ効果も期待できる。

クラスの人数は約20名。履修者をいくつかのグループに分けて、演習の後半時期にディベートの試合を行っている。これまでのテーマは、「死刑制度を廃止すべきか」「自衛隊の海外派遣を積極的に行うべきか」「ゆとり教育を進めるべきか」といったものであった。

ここまでの文章を読んで演習などへのディベートの導入に興味を持たれた方のために、このビデオ教材の内容とそれについての私のコメントを簡単に記したい。

私が演習で利用するのは、ビデオの第１巻のみである。すでに紹介したように、第１巻には実際のディベートの試合が収録されている。ディベートの進め方などについてはこちらからも説明するのであるが、何より実際のものを見てもらう方が効果がある。内容は、ある会社の人事部を舞台として、年俸制を導入するかどうかをテーマとして社員がディベートを行う、というものである。舞台設定が学生にとってはあまり身近ではなく、そこで行われる議論にも、年俸制一般についての事柄だけではなく、一企業の事情に関わるようなより具体的な事柄が含まれている。この点について、ビデオを教材に用いたいと思う方は考慮しておく必要がある。収録時間は約36分であり、90分の講義時間内で視聴するにはまあまあ適切な長さであろう。

第２巻では、ディベートのルールと進め方、データや資料の集め方と使い方、論理の組み立て方、説得的な主張の方法などについて説明が行われる。筆者自身の考えでは、データの収集方法や論理的な思考方法などは、このわずか数十分のビデオを見るだけでは到底身に付くものではない。これについては、演習や講義の担当者自身がしっかりと指導して、学生にトレーニングを積んでもらうしかない。もっとも、この巻は収録時間が28分とやや短めなので、参考として教材に用いることも可能であろう。ディベートのルールと進め方の部分だけを教材として用いる、というやり方もある。

最後に、肝心のディベートによる学習効果について述べたい。試合の本番だけではなくそのための準備作業も、学生たちはけっこう楽しみながら熱心に行っているようである。それが学生の論理的思考能力を育むのにどれだけの効果があったかを評価するにはある程度の時間も必要だろうが、この点で一定の効果はあったのではないかと考えている。